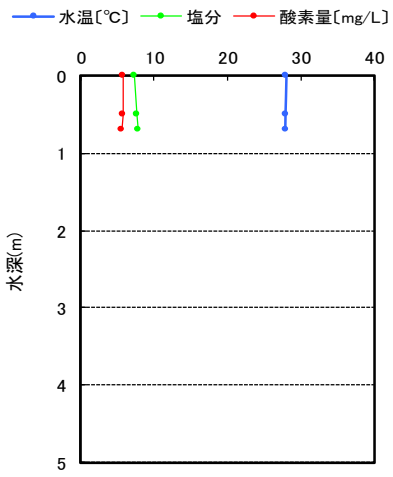
平成31年度　東京都内湾水生生物調査　9月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	多摩川河口干潟	調査年月日	令和元年9月2日　12:09　～　12:59

＜調査地点＞



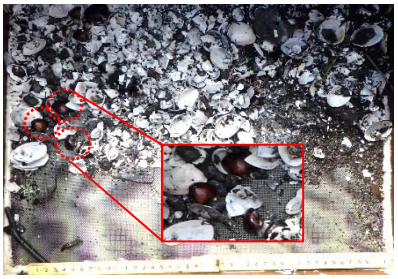
＜底質状況、底生生物出現状況＞

多摩川左岸側（東京都側）の海老取川河口付近の干潟で調査を行った。調査地点の陸側で護岸工事が行われていた（鋼矢板が設置されていた）。

底質はシルト（粒子が砂より細かい泥）が混じった砂であり、臭いはなかった。

設置されていた鋼矢板には、多数のイワフジツボが確認された。

※写真のスケール1目盛：1mm



フルイ上には貝殻片が多く残った。貝殻片に混じってヤマトシジミがみられた。

タカノケフサイソガニ

甲幅3～4cm程になる。日本全国に分布し、河口の転石の下、カキ殻の中、護岸の隙間などに生息する。成体のオスのハサミの付け根に、毛の房がある（写真は未成体）。

ムロミスナウミナナフシ

体長2cm程になる等脚類（フナムシに近い仲間）。細長い円筒状の体をしており、白地に褐色の斑紋がある。干潟の表層部に巣穴を掘って生活する。

＜周辺の状況＞

ヤマトシジミ

ヤマトシジミ

殻長4cm程になる。河口干潟など淡水の影響の強い、砂底から泥底に生息する。日本産シジミは3種類いるが、食用として最も馴染み深い種である。多摩川河口干潟では、様々な大きさのヤマトシジミが採取された。

ヤマトオサガニ

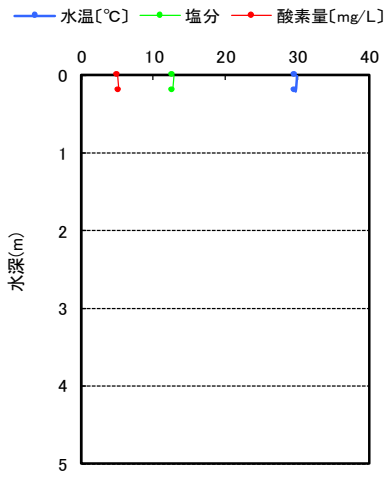
甲幅4cm程になる。柔らかい水分の多い泥干潟に斜めの穴を掘って巣穴を作る。巣穴の入り口には放射状の浅い溝ができる。

平成31年度　東京都内湾水生生物調査　9月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.31(多摩川河口)	調査年月日	令和元年9月2日　13:19　～　13:58

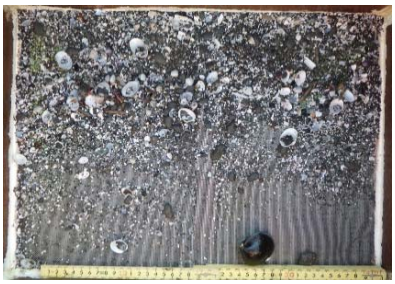
＜調査地点＞



＜底質状況、底生生物出現状況＞

多摩川河口から1.5km付近の浅場であり、干潮時には川の中に立ち込むことができる程浅い。調査時の水深は60cmであった。

底質はシルト混じりの細砂で、臭いはなかった。



フルイ上には、貝殻片が残った。

※写真のスケール1目盛：1mm

オキシジミ

殻長5cm程になる。殻は褐色であるが、泥中の硫化水素の影響で黒くなっていることが多い。

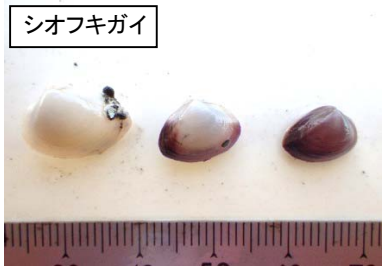
マテガイ

細長い筒型の形状をした二枚貝で、大きな個体では殻長10cmを超える。水管は輪が重なったようになっていて、刺激を受けると容易に自切する。

アサリ

殻長4cm程になる。潮干狩りなどで盛んに獲られている代表的な二枚貝。東京湾のものは形が細くて、模様のコントラストが強いものが多い。今回の採取個体は稚貝であった。

シオフキガイ



殻長5cm程になる。砂質底の潮間帯から水深20m程に生息する。殻の色は、白色から紫褐色まで変異が多く、実際に様々な色の個体が採取された。

ホンビノスガイ

殻長10cmを超える大型種。北米原産の外来種で、殻は白色。稚貝の頃は、同心円状の肋（隆起線）が特徴的。東京湾の湾奥の泥底やカキ礁周辺では多くみられる。今回の採取個体は稚貝であった。

紐形動物門

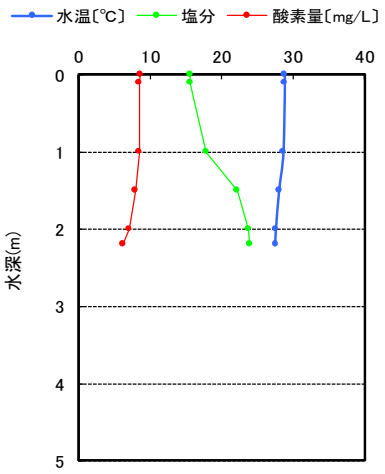
ひも状の生物でとてもちぎれやすい。ミミズ類のような縞模様や、ゴカイ類のような「毛」は持たない。肉食性で生きた多毛類などを捕らえて食べる。

平成31年度　東京都内湾水生生物調査　9月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	森ヶ崎の鼻	調査年月日	令和元年9月2日　11:05　～　11:51

＜調査地点＞



＜底質状況、底生生物出現状況＞

羽田空港の北側に残された干潟。干潮時でも周りは「海」に取り囲まれているため、歩いて入ることはできない。

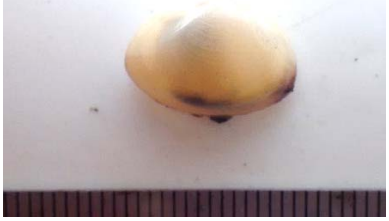
採取地点の底質は細砂であり、シルトはほとんど含まれていなかった。

干潮時に出現する干潟は水鳥の休憩上であり、餌場でもある。様々な生き物が干潟を利用している。

※写真のスケール1目盛：1mm

フルイ上には、貝殻片が多数残った。

シオフキガイ



※解説は、St.31を参照。
本調査地点では、白色の個体が採取された。

アサリ

※解説は、St.31を参照。
確認された個体数はSt.31よりも少なかった。

＜周辺の状況＞

ミズヒキゴカイ

砂泥干潟や浅瀬の海底に潜り、細い糸のような鰓と触手を水中に伸ばしていることが多い。名前の由来は、鰓と触手を水引（祝儀袋等に用いられる飾り）に見立てたもの。写真の個体は鰓と触手がちぎれている。

ヤマトシジミ

※解説は、多摩川河口干潟を参照。
確認された個体数は多摩川河口干潟よりも少なかった。

ホンビノスガイ

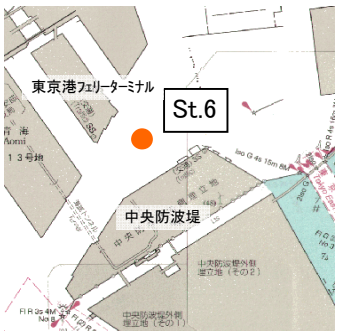
※解説は、St.31を参照。
採取された個体は殻長10cm程の大型個体であった。

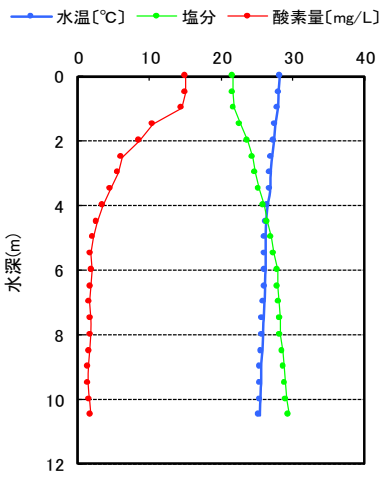
平成31年度　東京都内湾水生生物調査　9月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.6	調査年月日	令和元年9月2日　9:58　～　10:35

＜調査地点＞





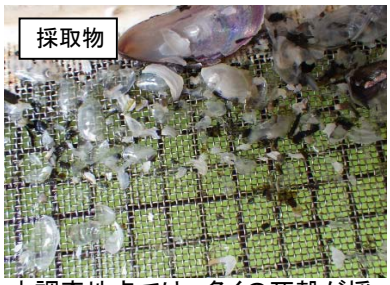
＜底質状況、底生生物出現状況＞

東京港フェリーターミナルの正面で採泥を行った。航路であるため、水深は11.5mと深い。海底付近の酸素量は1.7mg/Lと貧酸素状態（貧酸素状態の目安：2.0mg/L以下）となっていた。

フルイ上には、貝殻片と植物片が僅かに残った。

底質の性状は、シルトであった。海底面は酸素があるため、表面の泥は灰色であったが、泥の中は酸素が少ないため、黒色であった（還元状態）。

採取した泥の臭気を確認すると、弱い硫化物臭（腐った卵のような匂い）がした。



本調査地点では、多くの死殻が採取された。

※写真のスケール1目盛：1mm

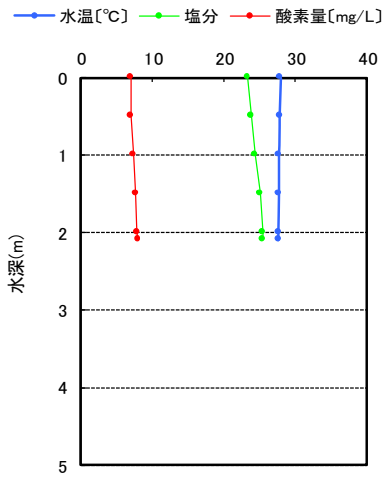
本調査地点では、多くの死殻が採取された。特に多かったのが、シズクガイとコウロエンカワヒバリガイ、チヨノハナガイである。シズクガイは貧酸素耐性があり、無酸素状態でも水温25℃であれば1日間生存できる。コウロエンカワヒバリガイは外来種で、東京湾では代表的な付着生物である。チヨノハナガイは殻長1.5cm程の二枚貝で、貧酸素水塊でも酸素がある期間に短期的に発生することが知られている。

平成31年度　東京都内湾水生生物調査　9月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	三枚洲（荒川河口）	調査年月日	令和元年9月2日　8:50　～　9:38

＜調査地点＞



＜底質状況、底生生物出現状況＞

荒川と旧江戸川の河口に残された天然の浅場。調査時の水深は3.1mあり、大潮の干潮時でも干出しない。すぐ横は、東京ディズニーリゾートである。

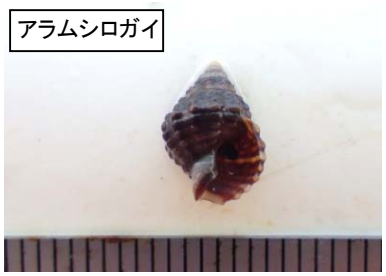
フルイ上には、貝殻片が残った。

※写真のスケール1目盛：1mm

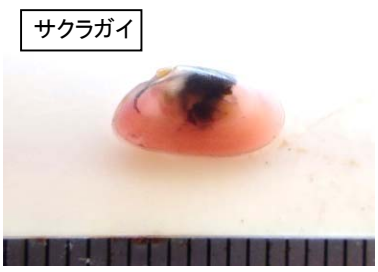
水深が浅く、海底の表面が固いため、重量のある採泥器を使用した。

底質は細砂で、シルトはほとんど混じっていなかった。海底の表面が固いので、採泥作業は一苦労である。

殻長15mm程の整った円錐形の巻貝。殻はやや厚く、殻の色は灰白色から黄白色である。潮通しのよい砂泥底に生息する。



殻高15mm程になる。殻の表面には粗い粒状突起が並ぶ。干潟から水深3mの砂泥底に生息する。魚や貝の死骸を食べる性質があり、「海の掃除屋」と呼ばれている。



殻長20mm程の長卵形。桃色の殻が特徴的。内湾の干潟から水深30mの砂泥底に生息する。近年、個体数の減少傾向が各地で報告されている。

3対の鰓がある。ハネエラスピオの仲間は日本では4種類が知られ、本調査ではこれまでシノブハネエラスピオとスベスベハネエラスピオの2種類が採取されている。